

縄文住居復元の正しさ

要旨

氏名：田木 浩大

私は今回、この論文では、縄文時代のふくげん住居における「正しさ」や「信憑性」というものはどこから来るのかという事を研究していく。縄文時代というのは、今から 16000~3000 年前の時代区分であり、この時代の建築の物的証拠が少ない。これを現代にふくげんしようとする、物的証拠以外に想像などの要素必須となってくる。我々が今日見るふくげんされた竪穴住居のオーセンティシティの根拠は何かを調べるのがこの論文の目的である。

この研究の動機は、2019 年に自由研究セミナーで実際に発掘調査を行い、遺跡が掘られた状態を目の当たりにして、なぜこの状態から我々が想像する茅葺の竪穴住居をすることができるのだろうと疑問に思ったからである。本文で記述した通り、一般人が見たらただ工事現場のような場所から立派な住居をどのようにして作ったのか、国指定遺跡として教科書に乗せるまでの根拠はどこから来たのかという問がこの論文を書くきっかけになった。

研究の方法としては、まず、比較対象として、八ヶ岳山麓の梅之木遺跡、井戸尻遺跡、尖石遺跡を調査する。この三つの遺跡は近接しており、同じ縄文時代の遺跡で、どれも国指定遺跡である。遺跡が近接していることから、文化圏も同じか似ていると考えられ、ふくげんされた建物を比較することで人為的な不可要素が見やすくなると考え、これらの遺跡を調査対象とした。これらを Bruner (Bruner 1994) のオーセンティシティとライフヒストリー論 (吉田 n.d.) を使用して比較していき、それぞれが何を根拠にオーセンティ

ックなのかを調査していく。そして、足りない情報をそれぞれの遺跡関係者にインタビューして補填していく。

分かったこととしては、どの遺跡も互いに違うオーセンティシティを持ち合わせているということ、そしてどれも複数の面からオーセンティックであり、それには多様性があるということである。それらは、実証研究や住居のふくげんにかかわった人や時代背景、県民性などの考古学的根拠以外の要因によるものもあった。現在では考古学をする方法にも要点があることが分かった。最終的な結論としては遺跡整備には、なぜ正しいのかではなく、誰に対してオーセンティックなのか、何を残したいのかを重視して、その遺跡の存在目的を考える事が重要になっているのではないかという結論に至っている。